

「だがしや楽校を開こう！～新たなつながりと集いの場が未来をつくる！」

杉並に大集合 全国のだがしや楽校実践者！

第3回：2009年7月7日（火）午前10時～12時 あんさんぶる荻窪

第4回：2009年7月21日（火）午前10時～12時 あんさんぶる荻窪

ゲスト

弓削幸恵さん（静岡まちなびや）、嶋麻里さん（マリー英会話楽校）

田中靖子さん（教育支援協会）、磯崎恵美子さん（藤沢市善行公民館）

【ねらいと進め方】

「人間個人も人間社会の文明もそうですが、創造的な活力は、他者との交流と触発によります。杉並区のさらなる活力もまた、他地域との交流によって生み出されていくと思います。そんな気持ちで、外の世界とのつながりもつくりながら杉並に新たな集いの場をつくっていきましょう」（学習支援者 松田道雄さん）。松田さんの提案を受け、2回にわたり、だがしや楽校実践者をゲストに招きました。前半は、“学校”的に実践者が活動の紹介を行い、後半は“駄菓子屋”的に、実践者との質疑応答の後、受講者同士が自由に意見を出し合い、自分たちのつくりたい、だがしや楽校のイメージを探りました。

1. だがしや楽校実践者からの報告（実践事例紹介）

（1）まちなびや（静岡市）

「まちなびや」は、学区（まち）で子どもが育つしくみの実践研究所である。「一人ひとりの思いや特技を紡ぎながら、子どもがのびのびと育つまちを創っていきましょう！」を合い言葉に、以下のような多様な活動を展開している。

学区（まち）のお宝さがし

- ・子どもの生活圏にある「ひと・もの・こと」の魅力を発見する。
- ・地域に根づいていた子ども文化を記録に残す。
- ・聴き書きして本やデータベースにまとめる。

子どもの居場所づくり

- ・子ども自身が「行きたいところでやりたいことをやる」のを見守る。
- ・駄菓子屋（とまり木児童館）：社会実験として事務所の一角に駄菓子屋コーナーを設置。
- ・冒険あそび場：地域の大人が放課後の子どもの自由な遊び場を見守る。プログラムなし、自分で自由

に作ったり遊んだりする。

- ・「子どもふるさと玉手箱」：遠いまちの子ども達と、地域の当たり前のものを交換し合う。

人の輪づくり

- ・静岡市で初の『だがしや楽校』講座を開催。
- ・『だがしや楽校店主の寄り合い』の開催（毎月1回）
- ・近所の公園で気楽に「だがしや楽校」の開催。
- ・講座「だがしや未来考」：駄菓子屋の価値をテーマにしたワークショップの開催。
- ・地域をテーマにした商品・教材の開発。

<活動を通して学んだこと>

「土台は一人ひとりの生活にあり、だがしや楽校は“場”というより、人と人との“ネットワーク”だと思う。そして、だがしや楽校を通じて、生活をステップアップすることにつながる事が大切だと考える。」（弓削さん）

【参考】まちなびや <http://machinabiya.yatsuyama.jp/blog.cfm>

（２）マリー英会話楽校（焼津市）

子どもに英語を教える中で、「子どもに英語は必要か？」と自問自答している時に松田道雄さんの「だがしや楽校」に出会い、感動。だがしや楽校の考えを取り入れた教室にしようと、名称も「マリー英会話楽校」と変更し、拠点を焼津市に構える。以来、積極的な活動を展開している。

- ・「がってんノート英語版」(2008年5月完成)：松田道雄さんの「がってんノート」そっくりの英語版。
- ・「だがしや楽校 in 焼津」開催(2008年6月～)：子どもハローワークでお仕事体験、フィリピン支援バザー、駄菓子屋、など、生徒ママのボランティアを含め、大勢の大人を巻き込み、100人を集客。
- ・「ふるさと玉手箱」(2008年10月～)：遠いまちの子ども達と、地域の当たり前のものを交換し合う対象は福島県、インドネシア、フィリピンなど。
- ・「分けっこバッグ」(やーづバッグ)：漁港の焼津には、漁船の帆布をつくる工場があり、昔は帆布を、現在は厚手のビニール素材やテント地を使った仕事をしている。松田先生の意向を受けて、嶋さんが、残り生地を使い、「みんなで集まる時に“分けっこ”する」ためのバッグづくりを依頼。モノづくりの楽しさに目覚め、「仕事と余暇を分ける必要はない」と感じた。

<現在の思い>

「活動を通して人との出会いが増え、人の輪が広まった。心の中に“社会性”が生まれ、私自身も大きく変わったと感じている。だがしや楽校は、大人も子どもも、人がつながり、幸せになる場だと思う。これからも人とつながるツールである『分けっこバッグ』を携えて、さまざまな地域の人たちと交流したい。」（嶋さん）

【参考】マリー英会話楽校HP：<http://www.ac.auone-net.jp/~marie/>



写真：『分けっこバッグ』

(3) 田中靖子さんの実践(NPO法人教育支援協会) / 磯崎恵美子さんの 藤沢市善行公民館「だがしや楽校@善行」

「地域の教育力向上を」テーマに、藤沢市の善行公民館で「だがしや楽校@善行」を開催(09年3月29日)。その中心的存在であるNPO法人教育支援協会の田中靖子さん、善行公民館職員の磯崎恵美子さんにご登場いただき、学習支援者の谷原さんがお二人にインタビューする形式で進められた。

(田): 田中さん (磯): 磯崎さん

<「だがしや楽校@善行」のあらまし>

・当日の目玉イベントの「おばけやしき」を主催する同実行委員会は、小中学生が中心。昨年の9月から月1度のペースで集まり、セットや小道具などを制作してきた。イベント参加や駄菓子の購入には現金を用いず、スタンプを使用する。スタンプを手に入れるには、「お仕事斡旋所」で仕事をもらい、イベントのキップ受取や会場案内などの仕事を15分ほど行う仕組み。「昔はお手伝いをして、そのお駄賃で駄菓子を買っていた。現代の子どもたちにも、労働の対価で欲しいものを得るという経験を」と同館職員の磯崎さん。

・当日用意されるタマゴボーロなどの駄菓子は、全国に協賛を募り、各メーカーから無料で提供されたもの。協賛会社から提供された牛乳カップのメンコやベーゴマなど、今ではあまり触れることのない遊び道具もそろそろ。その他、当時使用された昔ながらの紙芝居上演も。磯崎さんは、「より多くの人に集まってもらい、今後も地域のイベントとして定着していけたら」と話している。

(同イベントを告知するウェブサイトより抜粋)

活動を始めたきっかけは・・・

・横浜の放課後の子どもの居場所「はまっ子」に勤務していた時に、限定された大人しか子どもに関わっていないことが気になっていた。そんな中、松田さんの「だがしや楽校」に出会い、とりあえず、やってみようと思い始めた。(田)

・どのようなものを作ればいいのか、そのイメージをキーワードとして整理した(磯)

・活動の展開に不可欠な人間関係(協力者)や地域でのネットワークなど、新事業に関して不安もあったが、とにかくやってみようと思った。公民館では、比較的やり易い事業と考えた。まずは地域の人たちにだがしや楽校という名前を知ってもらうこと。そして、子どもが動く大人もつられて動くから、まずは子どもたちの気持ちをつかもうと考えた(磯)

・予算の問題をどう解決するか。まずは、地域の団体のトップにかけあった。(磯)

・始めは町内会にも協力を呼びかけた。その後は、やりたい人だけが集まってできるようにしていった。

(田)

どうやって地域の人たちを巻き込むか(理解や場所)

・団体のトップから始めて、一人ひとりときちんとつきあうことが基本。信頼関係を築いてこそ、事業をスタートすることが可能になる。(磯)

・子どもの居る場所(環境)は、学校など、基本的にはタテ関係のところが多い。子どもたちに必要なのは「斜めの関係」。多様な大人を集めることができればと思い、町内会組織、地域の人たち、市民

活動をしている団体、大学などをまわり協力をお願いした。その時には、子どもたちのためにということだけでなく、お互いにメリットが見えるような関係を目指した。(田)

関係者のそれぞれの役割は？

・地域のお祭りやだかしや楽校は似ている、違いは、祭りには最初から絵(完成図)があるが、だかしや楽校は、完成図はなく、やりたい人がやりたいことをやる。来た人が楽しむ、そこに出来上がったものが完成図。その完成が見えないところが魅力。(田)

・「参加者全員が満足」するためにも、役割分担が必要だと思う。関係者は、基本的に、一人が一つのことしか関われないから、特に、全体を見る人が必要になる。(磯)

実際に経験してみて感じること

・苦労が多いことは確かだ。しかし、子ども、お母さんの感謝の言葉に励まされてやり遂げることができた。違った価値観を持った参加者をどうまとめるかで悩んだ。こちらに合わせるのではなく参加者のそれぞれの主義主張は認めるようにすべきだと感じた。ただし、その場合、それらの価値観の違う団体を一つのイベントにまとめる管理人の力量が問われると感じた。(田)

・めったに子ども来ない公民館に子どもたちが集まった！ それだけですごいこと。(磯)

・「やりたい！」と言うことの楽しさを実感。決して「やらねばならない」ではない。人と人の関係性こそが、だかしや楽校の醍醐味だと思う。(磯)

・やらなくてはならないという義務感でやる活動は継続していかない。人を動かすのは「楽しい」という思いだと分かった。そこに集まる人のネットワークがコミュニティになるといいと思う。(田)

・テキ屋さんと近所のおじさん・おばさんの違いは、「また会える」「いつでも会える」関係の差。(磯)

・自分のお店を出すことで子どもたちは自信を持つ。そしてお客さんとして来た大人たちにもきちんと会話をすることができると分かった。子どもたちや役割を与えられ、期待をかけられそれに応える体験の中でとても成長していくことが分かったし、それを見る大人たちにも子どもたちの力を信じるようになった。(田)

【参考】

NPO法人教育支援協会 <http://www.kyoikushien.org/>

藤沢市善行公民館 <http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/manabi/data07280.shtml>

<松田さんのコメント>

大人塾らしく、「子どものために」ではなく、「自分たちのやりたい」ことをやりましょう。大人が対象でも可、大人も子どもも対象も可。そして、有料でも無料でも構いません。

2. 受講生同士の話し合い(駄菓子屋)

(1)「まちなびや」(弓削さん)さんとの小グループ対話

運営費をどこから調達するか。「助成金を利用できないか、それが今後の課題」との話。

「くじゲーム」で「道具づくり」の楽しさを知る。

子どもたちが「くじ引き」遊びに夢中になった。お菓子そのものより、くじ付きというアイデアが受けたと思う。「ワクワク・ドキドキ感」がポイントだ。ただし、「遊びが学びにつながる」ような工夫が不

可欠、との話を受けて、値段設定や仕組みについて質問が集中した。

・「現代の子どもたちは忙しいから、集めるのが難しいのでは？」という質問に対しては、「塾や習い事と、現代の子どもたちは忙しい。しかし、ほんの少しの空き時間でも、子どもは遊びたいと思っている。その気持ちを大切にしたい。」

「営業許可を取る必要はないのか」に対しては、「“生もの”を扱わないので取得する必要はない」とのこと。

(2)「マリー英会話楽校」(嶋さん)との小グループ対話

「分けっこバック」の開発について

- ・焼津周辺を活動の場としている。漁港のまちなので、漁船の帆布工場がある。
- ・松田道雄先生のアドバイスで昭和初期創業の細谷帆布さんに依頼。最初は相手にしてもらえなかったが、今では、経営主の母(細谷厚代おばあちゃん)と相談しながら、作製、改良に取り組んでいる。
- ・厚手のビニール布・テント布等の残り生地を活用したバッグを作ることを思い立ち、完成したのが「分けっこバック」。みんなで一緒に集まるとき、思い思いの品物を持ち寄って「分けっこ」する際に活躍する。「細谷おばあちゃんが、仕事が終わった余暇を利用してつくるので、丁寧な作品となります。」

「みかん型」「ポシェット型」「ベイベー型」も開発

残り生地を使うので、できるポシェットはどのような色・柄になるのか完成まで分からない、これが魅力の一つと考えている(1点もの)。

- ・財布、携帯電話、デジカメ、化粧品等の小物入れとして使うのが「ポシェット型」です。
- ・09年8月初旬に30個限定で販売する。

値段：3,000円～3,500円

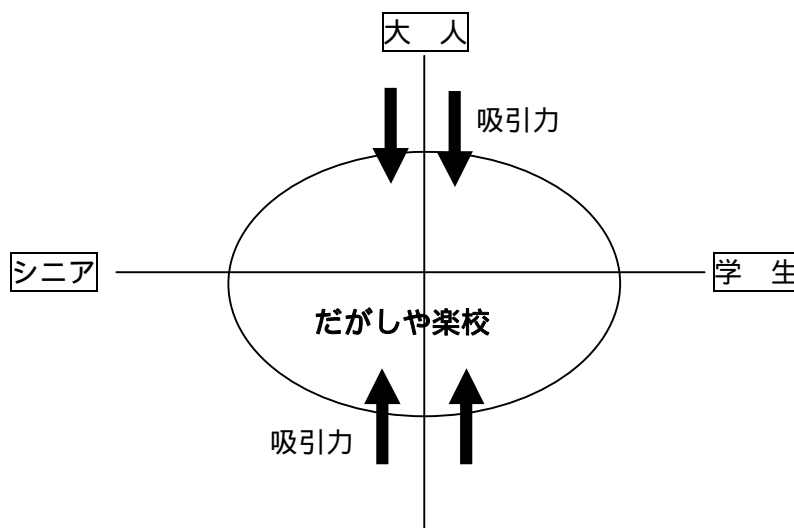
(3)あるグループの対話(A)

テーマ：「なぜ、だがしや楽校の行事で集う必要があるのか？」

課題：「場」を、大人用、子ども用、シニア用、学生用のどこにするのか。

- ・シルバー、大人だけで満たされないものがある 解決方法は？
- ・答え 子どもの吸引力：子どもと一緒に居る(活動する)と、思わぬ貴重な体験をする 大人の場に子どもを入れる このグループのコンセプト

(参照図)



子ども

<ポイント>

- ・なぜ、集う場所が必要なのか？
- ・その人の歴史の最も原始的な関係や姿から試みてみよう

(4) あるグループの対話(B)

枠を設けず、自由に「何がやりたいか」を話し合った。

- ・地域の祭りは、大人と若い子どもが中心。ここに、中高生から30歳代までを参加させたい。
 - ・“なつかしさ”を引き出す味を提供したい。
 - ・映画「三丁目の夕陽」をイメージした展開を考えたい。
 - ・いつも隣に大人(父母・祖父母・おじさんとおばさん・・・)がいる環境を提供したい。
 - ・「ゆうゆう館」を活用してみてもどうか。だがしや楽校をスタートする場としてふさわしいと思う。
- ここでお年寄りと子どもたちの出会いを演出したい。
- ・公園などのオープンスペースでの展開も、開放的で楽しいのではないか。

3. 受講生より提案

1. 「地域コミュニティが健在の川越へ、駄菓子屋を訪ねに行きましょう。リアルな店を見学することで、私たちの頭の中にある駄菓子屋のイメージをふくらませよう」との提案があり、川越遠足の実施が決まった(7月18日実施予定)。
2. リンゴ箱をだがしや楽校のアイテムとして活用しよう。リンゴ箱1つのスペースを自分の店と想定して、ここに何かを並べるか、どのように売るかを考えてみてはどうか。

4. 谷原さんより参考事例の紹介

自宅の駐車場を開放して手作りケーキ屋さんを開いている例が紹介された。オープンは、第2、第3、第4の土曜日午後だけだが、近所のたまり場、地域住民の交流の場になっているとのこと。「最初の第一歩をどう踏み出すか」を考える際の良きヒントになるのではないかとのこと。

5. 松田さんより提案

「自分がやってみたいと思うことをタネにスタートしましょう。また、だがしや楽校の活動を始める際、まず役割分担を決めてはどうか。店のイメージや道具をつくる人も必要であるし、活動全体をプロデュースする人も必要。いずれにしても“自分たちでやり遂げる”という強い気持ちが不可欠です」。

「こういうことをやりたい!」、「このような屋台を作りたい」という、自分たちが作る「だがしや楽校」のイメージを描きましょう。また、ゲストを囲む交流会の意義は、横並びのコミュニケーションにあります。他地域の活動を参考にしながら、自分たちなら、どのようなだがしや楽校を作るのか、全体

の運営やスタッフ構成などを考えてみましょう。

次回（第5回～）以降の展開について

1. アイデアの持ち寄りと整理。
2. 役割分担（屋台チーム / 運営チーム）を行う。

輪読参考資料

- 1 松田道雄著：「駄菓子屋楽校 あなたのあの頃、読んで語って未来をみつめて」新評論 2008
- 2 松田道雄著：「関係性はもう一つの世界をつくり出す」新評論 2009
- 3 松田・矢部 絵 たるい「だがしや楽校のススメ」創童舎 2003

提案

- 1 みんなで講座のブログをつくりませんか？
「だがしや楽校オン・ザ・ウェブ」

<http://www.dagashiya-gakko.com/>